みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# ただいまオンエアー：みんぱく映像民族誌



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-01-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 三島, 禎子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009318 |

# ただいまオンエアー
## ──みんぱく映像民族誌

セネガルの「文化祭」の映像取材をするために、2017年11月、国立民族学博物館の取材班2人とともに現地に赴いた。5日間で25村をまわり、それぞれの村で紹介される伝統儀礼を記録するのが目的であった。取材に行くことになったのは、筆者が同地域でソニンケ民族の移動と経済活動について長年調査をしてきた関係からである。伝統儀礼の記録も民族文化の観点からは重要だが、むしろ伝統儀礼を再興しようとする社会・文化的背景や文化祭を開催する経済的背景に興味があった。

この文化祭はソニンケ民族が主体となっている点から、筆者は「民族文化祭」であると考えていた。外国への労働移民が多いセネガル河上流域では、生活環境の変化とともに伝統儀礼の多くが失われつつあった。それを移民の経済力に頼って再興しようとする動きだととらえていたのである。移民による送金は、家族の生活向上に加えて、地域の社会的発展にも役立ってきた。新しい家が建ち、どの村にも学校や診療所、モスクが整えられた。「民族文化祭」への寄付は、移民による新しいかたちの富の分配であり、そこに名誉という価値が与えられる構図を予想していたのである。

しかしこの行事は「民族文化祭」ではなかった。主催した地域ラジオ局は「統合の電波」というスローガンを掲げ、宗教や政治的な危機によって分断された地域間統合を射程に据えている。同地域は、セネガル河を隔ててマリやモーリタニア、セネガルが国境を接している。隣国マリでは近年トゥアレグ独立派とイスラーム原理主義派の抗争があった。モーリタニアとセネガルでは1989年に牧畜民と農耕民との諍(いさか)いが2国間での激しい紛争に発展し、同じ民族や家族が対岸に住んでいるのに、長い間往来ができなかった。このような状況をふまえて、文化祭では国を越えた民族的連帯の強化を目的とした。

文化祭の開催には多くの資金が必要となるが、セネガルの法律では地域ラジオ局には広告が禁じられており、資金源が極めて限られている。そのためにラジオ局は電波が届く限りの村々すべてに特派員を置き、人びとが依頼するアナウンスを有料で集めるシステムを作った。これによって国境を越えたネットワークができた。

ラジオ局は地域発展を推進する団体としても活動している。セネガル河上流域は内陸に位置し、首都からは遠いうえ道路事情は非常に悪い。半世紀以上にわたって、移民は家族と村落への送金を続けてきたが、道路整備事業はかれらの経済力ではまかないきれない。人々は電化製品を買うことはできても、電気をひくのは国家の事業である。植民地時代以降、沿岸部の開発ばかりが優先され、内陸は忘れられてきた。それに対抗する手段が「文化祭」である。文化の力で地域の存在を主張しようというのが文化祭のもうひとつの狙いである。

そこで登場するのが、女性たちである。男性の多くが移民として村を離れているこの地域で、ラジオ局は女性たちを組織して、小規模の経済活動を行うグループを作った。彼女たちは行事のための椅子の貸し出しや商品の小売りなどを共同で行いながら、利益を出している。文化祭では各村で演目が紹介されるが、それを考案し、準備し、演じるのは、このグループの女性たちである。そして主催者側の招待客を接待し、宿泊先を提供したり食事をふるまうのもこの女性たちである。

結果として、筆者が予想していた構図はすべて間違っていた。文化祭は「民族文化祭」ではなかったし、経済的に行事を支えていたのは海外にいる移民ではなく地域ラジオ局の呼びかけに応じて寄付をした人びと、地域の女性グループ、私財を投じた国内の篤志家などであった。

この取材内容は民博の「みんぱく映像民族誌」としてまとめられる。セネガルの国営テレビ局が伝統儀礼の内容を中心に取材していたのに対し、われわれは文化祭の成り立ちに焦点を当てることで、現代を生きる人びとの諸相を描きたいと考えている。

文化祭の様子はラジオを通して、生放送された。映像はないが、各村での歓待の挨拶から演目の内容、音楽、歓声、取材の様子などが、現場から地域の人びとへ直接伝えられた。ラジオを聴いている人びとも、その場にいて文化祭に参加しているかのような盛り上がり方であった。1週間の取材期間中、われわれもオンエアーの臨場感のなかにいた。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

ラジオ局の中継車の前で踊る少女たち(2017年、セネガル)。

村から村へ移動するラジオ局の中継車(2017年、セネガル)。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

ラジオ局から取材を受ける女性グループの代表(2017年、セネガル)。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

出番を待つ若い女性たち(2017年、セネガル)。

文・写真　三島禎子

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は文化人類学、西アフリカ研究。共編著に*Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*(L'Harmattan 2014)、論文に「民族の離散と回帰──ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井洋監修・編、小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130(明石書店 2011年)などがある。